

石井十次顕彰会だより

第7号

高鍋町中央公園内に建つ「石井十次像」



財団法人 石井十次顕彰会

石井十次顕彰会事業内容に「福祉施設へ賛助金贈呈」という項目があり今年、次の施設へ送られた。



福祉施設賛助金
日向市北町1105-2 「風車」溝口裕子様へ



高鍋東小学校へ



ヤングコアたかしん（高信杉の子会）会長 税田格十様から尾崎理事長へ寄附贈呈された



町内小・中学校の道徳授業（石井十次を教材）のビデオテープを各校に進呈

募金者報告第七号

平成九年四月一日
平成十年三月三十一日

篤志寄付

- 高鍋町 高鍋太陽銀行高鍋支店 (代)黒木 勝様
- 〃 寿石油有限公司 (代)後藤栄土様
- 〃 立正校正会高鍋教会 (代)久保勝代様
- 〃 津房商事有限公司 (代)津房昌明様
- 〃 高鍋信用金庫 (代)税田格十様
- 〃 黒木本店 (代)黒木敏之様
- 〃 石井十次顕彰チャリティ「高鍋町ゴルフ大会様
- 〃 坂本実業博友会 (代)坂本博文様
- 〃 館野 キミ様
- 〃 ヤングコアたかしん (杉の子会) (代)税田格十様
- 〃 川南町 原建設 (代)原 通様
- 〃 都築アツ子様
- 〃 串間市 蓑田 節夫様
- 〃 木鳥 正之様
- 〃 宮崎市 印刷センタークロダ (代)原田安政様
- 〃 赤木 伸隆様
- 〃 鈴木 誠司様

忌明寄付

- 高鍋町 小椋キミヨ様
- 〃 森 俊彦様
- 〃 宇田津英二郎様
- 〃 石丸 正弘様
- 〃 井手口健二様
- 〃 宇田津一郎様
- 〃 鈴木 笑子様
- 〃 岩切 正美様

このたびは、多額のご寄付をいただき誠にありがとうございました。厚くお礼申し上げます。

あとがき

皆様のご協力のもと顕彰事業も年毎に広く深くなってきました。「石井十次顕彰会だより」も全町民にお届けして以来第7号となりました。ご家族みなさんでこらな下さい。

発行者：石井十次顕彰会
題字：宮崎県知事 松形祐典
印刷：(有)印刷センタークロダ
発行日：平成10年3月31日

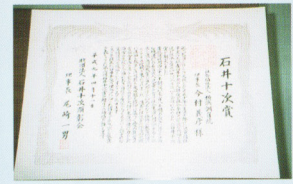


第六回 石井十次賞

社会福祉法人、横浜訓盲院へ
 平成九年四月十一日石井十次生誕
 記念式典当日に正賞「楯」と副賞
 が贈られた。



第6回石井十次賞として、社会福祉法人横浜訓盲院が満場一致で決定されたことを報告される「石井十次賞」選考委員長福田垂穂氏



謝辞を述べられる横浜訓盲院理事長 今村義彦氏



尾崎理事長より今村義彦氏へ賞状が手交された

石井十次賞選考委員会



「石井十次賞」正賞の楯
 (石井十次のブロンズ像と茶臼原憲法)



(選考風景)



受賞者
 社会福祉法人横浜訓盲院理事長
今村義彦氏

横浜訓盲院は、明治二十二年（一八八九年）キリスト教伝道のため来日していたアメリカ人のC・P・ドレーパー女史と、宣教師で息子のギデオン・F・ドレーパー親子が、横浜で貧しい盲女性と出会ったのがこの事業の発端である。

当初は、「盲人福音会」という名称で大人の盲人の保護と教育を行っていたが、大正九年前理事長の今村幾太がこの事業を引き継いだからは、キリスト教精神を柱に盲児教育へと転換した。そして後に、「横浜訓盲院」と改め全寮制の私立盲学校として運営された。特に、寄宿舎生活を通して、家庭の雰囲気大切にしながら生活訓練に力を入れたほか、盲人野球の創始者ともいわれており、又ハーモニカバンドの編成等、机上の学習だけでなくスポーツや音楽を通して情操教育の面でも大きな成果を上げた。途中、関東大震災・太平洋戦争中の戦災等のほか、困難を乗り越え常に経済的危機に直面しながらもさまざまな家庭事情を持つ盲児を積極的に受入れ、今日の盲児施設の先駆的役割を果たしてきたのである。

さて、戦後は、盲児施設と盲学校という二本柱で運営されてきたが、その中でハーモニカを中心とした器楽合奏は多くの方々に深い感銘を与えるようになった。しかし、昭和四十年代を境に年々「盲重複障害児」が増加してきたことからそのような盲児も積極的に受け入れ、戦後は、盲児施設と盲学校という二本柱で運営されてきたが、その中でハーモニカを中心とした器楽合奏は多くの方々に深い感銘を与えるようになった。しかし、昭和四十年代を境に年々「盲重複障害児」が増加してきたことからそのような盲児も積極的に受け

入れ大きな教育効果を上げられている。その後、昭和五十七年には新たに、「生活訓練センター」を設け中途失明者に対する各種の訓練を実施している。

訓盲学院の校門



▲ 坂道も階段もある施設
 ▼ (一般人と同じ環境になれること)



点字で打たれた教材(算数)



顕彰意見発表

平成九年四月十一日の石井十次生誕記念式典に於いて、高鍋町内の小学校、中学校、高等学校の児童生徒の代表の皆さんが「石井十次先生の顕彰意見発表」をされたものです。
高鍋町内に小学校・中学校・高等学校各二校があり隔年毎に交代で行われております。



高鍋西小学校

五年

甲 斐 あやみ

■石井十次先生を見習って

私が、「ご児の父」とよばれる石井十次先生を初めて知ったのは、小学校一年生の時でした。初めて知った時は、「すごい人なんだ。」くらいにしか思っていなかったけれど、「なわの帯」の話や、全然知らない人の子どもを何千人も育ててきたなどの話を聞いていたら、すごいところか、むねがじーんとあつくなってきました。

そんな石井十次先生の生がいで、私が特に心を打たれたことは、なわの帯の話や初めてご児をあずかったこと、医学書を焼いてしまったことの三つです。

「なわの帯」の話では、なわの帯をしめていた友達の名ちゃんがいじめられているのを見て、十次先生は、自分のりっぱな帯と取りかえてあげました。

私だったら、せっかくお母さんが作ってくれた帯を友達にやるなんてぜったいできません。友達を助けることへらいしができないと思います。私はこの話を聞

いて、「なぜこんなことができるのだろう」とふしぎでした。十次先生の人を思いやる心が、私には想像もできないくらい大きかったためにできたことだと思います。

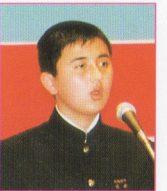
初めてご児をあずかったことについては、「十次先生の家は、まずしかったはずなのにどうしてご児を引き取ったのだろう。十次先生って、心のきれいなやさしい人なんだなあ」と、とても感心してしまいました。十次先生は、めくまれない子どもたちをほめておくことはできず、ご児たちを救ってあげたいと考えられたのだと思います。

医学書を焼いてしまった時、私は、「あああ、六年間勉強してきたのが水のあわになってしまふ」と思いました。私だったら、ぜったいに医学の道に進んで医者になつたと思います。医者になつてから、ご児たちのめんどうをみればご児も病人も助けることができ、ご児救さいのためのお金もたくさんできると思うからです。

でも十次先生は、ご児たちを救うことだけに、一生をささげようと決心されたので、私はすごいなあと思います。

私は、小さいころから、かんご心になることをゆめ見ています。病気の人や、かぜをひいてしまったたくさんの人を助けてあげたいからです。また、世界には、まだ薬も買えないほどのまっすしい国があるので、その国に行き、けがをしたり、病気になるったりした人を笑顔であげまし、助けてあげられるかんご心になりたいです。そのためには、今からこまっすしている人に手を差し伸べてあげられるようにしたいです。

私も石井十次先生を見習って、色々なことに努力したり人に親切にしたりできるように心がけて、心の美しい、思いやりのある人になりたいと思っています。



高鍋西中学校

三年

清水 俊次

■石井十次先生について思うこと

昔、石井十次という人がいました。人生の途中でなりましたかた医者になることを断念し初めは岡山、続いて茶臼原に孤児院を開きました。そして、孤児院で千二百人ばかりの子供といっしょに住み、後には、「孤児の父」とたたえられるようになりました。

ほくは、彼はなぜこのように有名になったかを考えてみたいと思います。

十次はある意味では「変わった人」だったのでないでしょうか。なぜなら、十次は人とずいぶん違う人生を歩んだのですから。十次は二十四歳のときにそれまで目指していた医者への道を完全にあきらめ、孤児院救済への志を立てました。それは、彼の周囲にいた人たちにとっては考えられない行動だったと思います。もし、ほくが、十次の近くにいる人だったらこう思ったはずで、「どうしてそんなことをするのか。医者への道を歩めば安泰なのに。どうして今までの目標を新しい目標に替え、またゼロから歩み始めるのだ。」と。それでも、十次は、自らの信念を貫き続けました。その点十次は「実行」のできる人だったのだと強く感じます。

ほくはこの十次の「実行」という点について、みんなが学ぶべきだと思います。思ったり考えたりするのは簡単でも、実行するのは難しいことです。自分の頭の中で思うだけでなく、他人にわかるような形で結果を出すことは難しいことです。

最近では、阪神大震災の時や、タンカーからの重油流出事故の時に、多くのボランティアの人達が被災地にかつて、復旧のための作業をしました。これらの人は、石井十次のように、人のいたみを受け取めることができる、また「実行」することのできる小さな十次だとほくは思います。

多くの名もないボランティアの人と同様に十次個人としては、成功して有名になりたいと思つて行動したのではないと思います。でも、石井十次が歴史に名を残すような有名な人になったのは、一つには、石井記念友愛社のように十次の考えを受け継ぐ組織があったからかもしれません。でも、何より、十次が自分の人生の全てをかけて孤児院救済をした「実行の人」だったからだとはほくは思います。

ほくははじめに十次が「変わった人」だと思つて言いましたが、十次のような「変わった人」であることはすばらしいことだと思います。人はみなそれぞれの道を歩むわけで、一つとして同じ人生はありません。ほくが「変わった人」であることを恐れずに、自分の選んだ道を信念を持って生きていけたらいいなと思います。



高鍋高等学校

三年

石井 英里子

■『石井十次先生を想う』

キリシタンであった石井十次先生は「人間は、二人の主には仕えられない」という教えに従い、医学の道と、孤児救済の道、この二つの道の選択を強いられながら一つを選択されました。あと六か月余りで、医者になれるというのに、彼は「病を治すのは、誰でもできる。しかし、孤児救済は、私にしかできない、と考へかつ、医学の書物を全部焼いてしまったのです。私には大きな驚きです。

医者をしながらも、孤児救済はできるし、自らも貧しい上に、何の為に見ず知らずの孤児達を救う必要があるか、私には当初理解ができませんでした。自分の志を捨ててまで……………」

しかし、彼はキリストの夢を見ました。その時彼は、自分が今何をしなければならぬかということに自ら悟ったのでした。それから、苦しい生活をおして孤児救済の道一本に絞って専念して行くのです。

彼の一生にはキリストの教えが大きく関わっていたようですが、その中でも彼は、「自愛」つまり「いづくしみの心」をモットーにしていました。

彼の作った茶臼原憲法には、人間は全て同胞で、お互いに信じ合い助け合おうと。

第七回 石井十次顕彰会のつどい

■平成九年二月十五日 ■高鍋町中央公民館ホール

●児童劇

高鍋西小学校六年生全員出演

「岡山の大洪水」

石井十次の生家がすく近くにある高鍋町立高鍋西小学校では「石井十次先生をしのび会」を毎年全校児童が参加して行い、伝統的に六年生全員参加による「石井十次の劇」を披露しています。



劇の一コマ



大雨で増水を気づかう孤児たち



岡山孤児院の子たちによるたき出しのおにぎりをほうばる消防団



石井十次の歌の大合唱（手話を交えて）



劇中での音楽班の演奏



研究班の発表



中央公民館入口での石井十次写真展



西小学校児童の作品展



劇の終りに各班の紹介をします 大道具班です



人間は皆、大自然の恩恵のもとにいつも仕事に精を出すこと。

人間は皆、天に感謝し、節約を保ち、人の為に提供すること。

と記されています。まさにこれが彼の生きる証なのだと思います。

ところで、今日の私達には、彼のこの精神が欠けているのではないのでしょうか。飽食時代、つまり買ひすぎた食料は残飯へというようないたくな時代です。また、奇妙な犯罪や殺人、私達の身近では学校でのいじめなどが数多く起こっています。その典型的な例が、オウム真理教の“地下鉄サリン事件”です。彼らは自分達の目的を達成したいが為に自分の利益の為に、無差別にかけがえのない一般民衆の命を奪うという暴挙にでました。

人間である限り、してはいけない行為であるはずですが、現代の人間の中に「これが当たり前世の中」「こんなことはあり得る」という錯覚に陥っているのではないのでしょうか。現代の日本社会はそのような点でおかしいと思います。個人主義≠利己主義という構図つまり、自分さえよければいいという考え方があるように思えます。だからこそ、石井十次先生の精神を地球規模でもっと多くの人々が深く知ってほしいと思うのです。そして彼を鏡として生きて行かなければならないと思います。本当に彼は高鍋が生んだ世界の偉人です。彼を誇りにし、彼の教えを心に刻み、そうしていつも彼を目標にして誰かの役に立つて行きたいと思えます。

(英語でスピーチの日本語訳です)

